# 都市の"美しさ"を考える
## ――都市と女性、自然、街並み――

都市が社会的に発達するにつれ、その機能や都市活動をより向上させるために、
再開発が繰り返されてきた。
21世紀に向かう現代も急激に市街地の再開発が行われ、逆に街の個性が失われてきたといわれる。
街の個性――つまり都市が持つ固有の美とは？縦横無尽に話し合っていただいた。

**対談：井上章一氏 vs 近藤三津枝氏**

国際日本文化研究センター助教授　井上章一

1955年、京都市生まれ。京都大学工学部建築学科修士課程終了。京都大学人文科学研究所助手を経て現職。専門は建築史、意匠論。著書に『霊柩車の誕生』『美人論』『美人コンテスト百年史』など、旧来の学問世界に新風を吹き込む「新感覚派」研究者。

### 女性の進出で現場は揺れているんじゃないかな

**近藤●**最近、現場で働く人を対象にした求人情報誌が若者の間で非常に話題になっているそうですが、そこでは女性の募集や応募も多いそうなんです。建設工事現場でも女性が大きな建設機械を動かして土を掘り返していたりする、というように今までの女性になかった、なにか生き生きしたものがそこにはあると思うのですが…。

**井上●**女性にもそういった現場仕事への志向はあったということで、今まで押さえ込まれていた意欲がわいてきたのかもしれませんね。現在は機械化・省力化が進んでいますから、筋力が問われるということはなくなっていると思いますよ。でも女性が現場に入ってくると、男たちはがらっと変わるでしょうね。

**近藤●**おもしろいと思うのは、作業現場の衣服なんですが、最近は有名デザイナーのコスチュームを身につけているケースがあるんですよね。しかも女性と同じデザインのものを男性も着て、最初はちょっと気はずかしがっているんですけれど。でも、そのうち当たり前になってゆくんじゃないでしょうか。

**井上●**ピーコック革命とかいわれた頃から男たちがファッションに気をつかうようになってきたといわれてますけれども、しかし、建設工事現場というのはコスチュームなどということを気にしない最後の牙城のひとつだと思っていたんですが、ついにここまできたかという感じですね。こういう風潮を歓迎するかどうか、おそらく現場は揺れ動いていることでしょう。

**近藤●**コスチュームというのは現場の認識を変える有効な手段のひとつともいえますね。

**井上●**おしゃれで仕事のプライドが守られるというわけではないと思うのですが、たしかに何かを変えようとする時の要素のひとつにはなるかもしれません。

### 時代が変わっても"美人"というのは変わらない

**近藤●**先生は女性の美の変遷ということに関していろいろ研究なされていると思いますが、たとえば有名デザイナーの衣服を着て女性が現場で働く、というように外側を演出する装飾品によって女性に対しての美意識が変わってきているということはあるんじゃないでしょうか？

**井上●**それは変わると思いますよ。ただ、僕はね、髪型とかお化粧とかファッションは時代によって変わっても、美人に関しては変わらないと思います。たとえば平安時代にだれが見ても美人だった人は今でも美人だと思いますよ。江戸時代にメイクのハウツウ本がたくさんあるんですが、それを読んでもどうやったら日本画にあるような細い目になれるかなんて書いてありませんよ。みんなどうやったらぱっちりした目になれるかということを書いてありますから。たとえば細い目というのは美術上の約束事なのであって、なにも美人というわけではない。

**近藤●**あぁ、それは意外でした。私は美しさへの認識は時代とともにある程度変わるんだと思っていたものですから。

**井上●**話を時代から民族の方へ変えても同じですよ。人種・民族が違えば美人観も違うように思うのですが、かならずしもそうではない。たとえばジンギスカンのモンゴル帝国がヨーロッパに攻め入って、ハーレムをつくる際に、現地でやっぱり美人顔ばかり引っこ抜いているんですよ。それはモンゴル顔というのではなくてヨーロッパ人にも明らかに美人とわかる顔なんです。ファッションや風俗面はほんとうに時代や民族によって変わるけれども、目鼻立ちというか、造形への美意識は変わらないものだと思います。

### モードとして終わったあとの建築物の魅力

**近藤●**街づくりに関していえば、化粧法や髪型、衣服の流行が10年も経つととてもこっけいなものになってしまうように、次の時代に受け入れられないのは困るわけで、そういった意味ではその時代の流行の感覚にとらわれない、美しさとは何かと捜しだすのはほんとうにたいへんな作業ですよね。

**井上●**まったくおっしゃるとおりです。ところが実際には、

ジャーナリスト　近藤三津枝

兵庫県芦屋市生まれ。甲南女子大学文学部英文学科卒業。PAN-COT代表取締役。経済番組のキャスター、インタビュアーとして世界の動向や日本の問題点を積極的にレポートするとともに、兵庫県21世紀の道路を考える委員など街づくりの分野でも活躍中。

# 未来に拓かれた 自由都市、大阪

多くの建築物ではそういうところまで考えてないんじゃないかな。たとえば一番ファッションを気にする遊興施設などでは、デザイン上のトップモードとしての耐用年数は2年かせいぜい5年位。博覧会のパビリオン感覚だと思いますよ。

**近藤●**たとえば道路や街づくりといったような大きなものになると5年や10年でころころ変わるものではない、ある程度恒久的なものになりますよね。

**井上●**今、申し上げたのはひとつひとつの建築物の話なんですよ。もちろん、時代を超えて通じるものを創ろうという想いをもっているアーキテクチャーもいますが。多くの流行を意識した建築物はファッションと同じで、耐用年数は非常に短いのですけれども、モードとしての耐用年限が終わったあとでも続く魅力というのはあるんですよ。それを模索するというのは非常にむずかしいことですが。

**近藤●**魅力ということでいえば、たとえば道路づくりを考えた場合、今まで機能面を中心に計画されていたのが、「心やすらぐ道路」というように多様な付加価値を考えてゆくということなのでしょうか。

**井上●**注意しなければならないのは、まず美的な価値だけで道路計画を立てるということは現実的には無理でしょう。予算的なこともありますが「この方が美しいから」というような計画の立て方はないわけで、順番としてははじめに機能面があり、その条件のなかで最大限にどう美的に生かすかということでしょうね。

## 大阪の街は 21世紀の未来都市だ

**井上●**逆説的なことをいうようですが、美しくない街の方がよい、ともいえるのですよ。

**近藤●**え、それはどういうことでしょうか?

**井上●**パリがあのようにきれいになったのはナポレオン3世の政治体制の産物なんです。従来の建物を全部壊してしまって、道路を放射状のバロック方式にしてデザインをアンピール様式に統一するようにしたんですよ。ウィーンもドイツもそのようなものですし…。

**近藤●**そういう統一的な大きなデザインというのには何か特別な力が介在する必要があるということでしょうか。

**井上●**美を突出させた都市のグランドデザインは、相当強引な権力がないと無理だったということです。つまりこの場合、街は権力にとって、美しくしようという野望の対象になっているんですね。だから、ごちゃごちゃと無秩序に見える街であっても、権力という手枷足枷なく街づくりがなされているという点で、大阪は自由な都市であるといえるんですよ。

**近藤●**あるフランスの前衛芸術家が、大阪に来て、「食いだおれ」のお人形さんだとか、「かに道楽」のかにだとか、御堂筋だとかを全部見たうえで感嘆の声をあげたというんですね。大阪こそ21世紀の街だと。何をもってそんなことを言ったかというと、さっき先生がおっしゃたように、ある個人の思惑によって造られた街ではないと。これこそが21世紀の街なんだということだったんですね。

**井上●**それから、街が美しさを保ち得るのは徹底的な封建の中にあるんだともいえます。日本でも封建時代には町並み規制があったんです。身分や格式によって住む場所が決められ、またそれぞれの地域には同じようなデザインの住居が並んでいるのですからそれは見事な風景だったことでしょう。身分秩序の賜ともいえるんですが、つまり城下町の美とは封建秩序の反映だったと思います。近代的になるにつれて、そういった町並みがくずれてゆくんですね。ヨーロッパは街の遺産を守ることにウェイトがありますから、新しいオフィスを造ることもままならない。

**近藤●**だから、自由に都市デザインができ、活力あふれる大阪の街はヨーロッパの人が感嘆したように、未来に拓かれている街と解釈できるのですね。

## 川は視線を開放する 都市の吹き抜け部分のようなもの

**近藤●**都市の美しさの要素のひとつに「水のある景色」というのがあると思うのですが。たとえばパリとセーヌ川の関係、あるいは水の都、大阪であるとか、また嵐山の

# 人の視線の向うに広がる都市美を創造する

渡月橋は京都美の代表とされています。でも、今、この川と都市の距離がちょっと離れているのではないかという気がしますが、どうでしょうか。

**井上●**大阪の街にはもともと縦横無尽に運河が走っていたんですね。19世紀に日本に来た西欧人は大阪をよくベニスにたとえて、日本のベニスと呼んでいるんですよ。まさかカンツォーネを歌ってたわけじゃないけれど(笑い)、それほど水運が第一だったんですね。ところが道路交通が便利になると当然、船より車のほうが便利である、そこで川を埋め立て、あるいは柱を立てて道路を通すことを大阪は選んでしまったんですね。だから、今、道路交通面だけからいうと、川というのは何の役にも立たない存在だといってしまうこともできるんですよ。

**近藤●**でもせめて、今ある川だけでも裏庭にしてしまうのではなく、フロントにもってくる工夫が必要なんじゃないでしょうか。

**井上●**おっしゃるとおりです。僕は都市では川が主役になる必要があると思うんですよ。

**近藤●**なるほど。

**井上●**それと、川というのは視線が広がるんですね。街の中の視線というのはいろんな遮蔽物によってあまり広がらないのですが、川のところだけスコーンと遠くまで見通せる。それはそれで目がとても心地良い。だから、川は都市を建物と見た場合、その中の吹き抜け部分なのではないか。そういう意味では都市計画をする上でとても大切な部分だと思いますね。

**近藤●**そういう存在であるからこそ、川や橋には造った人の美意識が生きているという部分はありますか。

**井上●**今は少なくなったとはいえ、大阪はさすが水の都といわれただけあって、橋も非常に美しいものがありますし、橋の上からの風景もすばらしい。それと、さっき都市のなかの視線の話をしましたが、かつては水の上からの視線、ながめというものを非常に意識していたのではないかと思いますね。江戸の町も水運に頼っていたのですが、日本橋の大蔵省に、もと江戸の旗本の幕臣で明治政府に採用された建築家がいたのですが、彼がいくつか建てた橋というのは裏側がものすごくインパクトあるんですよ。これは明らかに川からの視線を意識した橋なんですよ。明治の行政がどんどん道路を通すという方向に行ったとき、江戸の伝統の水運の視線を意識していた旗本幕臣の想いが橋の裏に込められたんではないかとみることができるんです。

**近藤●**つい最近まで、都市にはそういった水との関わりの中での視線というものが大切に考えられていたのですね。

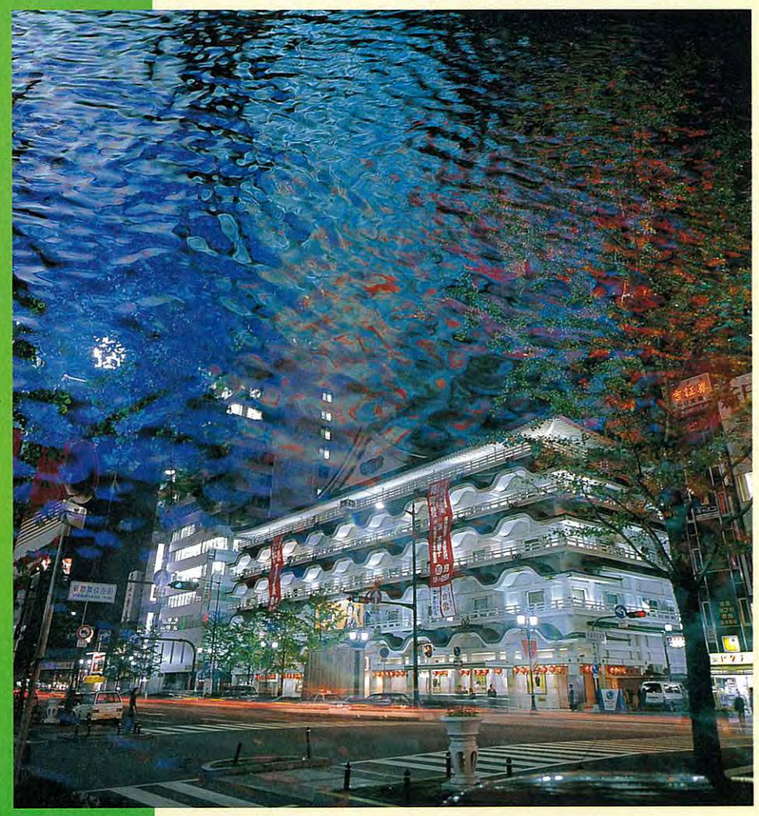
**井上●**だから、どんどん川が埋め立てられて街づくりが行われた時に、ビルの前に噴水やあるいは前衛風の池が造られたりしたともいえるでしょうね。

## シビルエンジニアリングの創り手として

**近藤●**都市の美しさということについていろいろお話をしていただいているのですが、では、その都市の美の創り手として、土木技術、技術者の在り方についてお聞きしたいのですが。

**井上●**たとえば護岸工事の話でいえば、単なる護岸工事ではなく都市全体を考えてデザインを、ということになると建築サイドとの共同作業になるのですね。川というのはそういう意味では土木の独壇場なんですが、そこに都市との付き合いを考えると、土木と建築との共同性が必要となる。ひとつの新しい都市を造ろうという場合はここが大きなポイントとなると思います。

**近藤●**「土木の日」というものがあって、土木業界を広報し、理解してもらおうという動きが最近あるのですが。

**井上●**PRということについていうと、先程の有名デザイナーのコスチュームの話ではないですが、僕としてはそこまでこそばい想いをしてソフト化をPRするよりも、むしろ男の世界を前面に出すのもおもしろいのではないかと思いますよ。土木業界には女性はトンネルに入れないといった女性に対するタブーがいくつかありますが、それをむしろ売り物にしてしまう。反動的かもしれないけれど、そういう厳しいタブーの門戸を開いた時の社会的な影響であるとか、効果は大きいと思いますね。

**近藤●**シビルエンジニアリング、つまり文明の技術を支える世界への女性の参加は文字どおり、女性の社会進出の象徴になってゆくでしょうね。今日はどうもありがとうございました。